

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 22 日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23653297

研究課題名(和文) 東アジアにおける米国社会科教育論の受容とインパクト

研究課題名(英文) A Study on the Impacts and Acceptance of the theories of US Social Studies Education in Eastern Asian Countries

研究代表者

草原 和博 (Kusahara, Kazuhiro)

広島大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：40294269

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円、(間接経費) 750,000円

研究成果の概要(和文)：日本の社会科研究者は、カリキュラム開発や授業改善などについて示唆を得ることを目的に、米国社会科の諸理論の一部を優先的に、とくに心理的・実証的な成果に比べて工学的・開発的な成果を意図的に選択し、受容してきた。

このような傾向が見られる背景として、日本の社会科研究者は、「研究」と「開発」を相互補完的な関係で捉えていること、「研究者」と「実践者」は連携・協働して課題解決や授業改善に努めるべきと認知していること、このような日本人研究者の研究観が海外の研究動向の摂取基準にも影響を与えたこと、などが考えられる。

研究成果の概要(英文)：Japanese social studies researchers are likely to choose and accept the parts of educational theories intentionality originated from US researchers, in order to have the practical implications into the curriculum development and class improvement in Japan, based on their disciplinary perspectives and methodologies which orient to the engineering-developing approach than the psychological-experimental one.

The reasons why do they emerge among Japanese researchers are as follows. Because, (a) they regard the educational Research as supplement to educational Development, (b) they recognize the Researcher has a significant responsibility to collaborate with the Practitioner for problem-solving and class-improvement, (c) their disciplinary perspective influences to the criteria of introducing the western research tendency into Japanese academic society.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：米国 社会科 インパクト 理論の受容 東アジア

1. 研究開始当初の背景

「社会科 (Social Studies)」は、米国発祥の教科である。世界の社会系教科目の多くは、地理科・歴史科・公民科などの独立教科として開講されている。実際のところ、「社会科」という名称の教科が存立しているのは、第二次世界大戦後に米国の影響力が及んだ地域、あるいは一部の発展途上国に限られる。なかでも東アジアにおける社会科の定着には、目を見張るものがある。

1946年にまず韓国で「社会生活科」が誕生し、翌年日本でも「社会科」が成立した。世紀を跨いで2001年には中国で新教科「品德と社会」が産声を上げている。問題は、これら東アジアで確立した「社会科」が、表面的な名称は似ていながらも、その実質的な機能には相当な違いが見られる点である。おそらくこれは、米国生まれの「社会科」の思想が、それぞれの国家の社会的文化的な文脈に基づいて読み替えられ、また各国独自の論理で「社会科」論を再構築してきたためと考えられる(仮説)。

先行研究は、日中韓の社会科の特色それぞれを論ずることはあっても、外国の教育思想や社会科教育論の影響は見逃されてきた。本研究では、このブラックボックスに風穴を開けたい。本作業を通して、日中韓では同じ「社会科」が展開されながらも、「社会科」の教育・研究のあり方には違いが見られる理由を、米国社会科教育論の影響に焦点化して解き明かす。

2. 研究の目的

本研究は、これまで「ナショナル」または「ローカル」な文脈で語られてきた日中韓の「社会科」の特色と成立の背景を、より「グローバル」な視野から、米国社会科教育論の受容とその学術的・実践的なインパクトに注目して解明しようとする。具体的には、以下の3点を明らかにしたい。

(1) 日中韓の研究者・教師は、米国社会科の思想をどのように自立的・選択的に受容してきたか?

(2) 1の受容のあり方が、日中韓の研究者・教師では、どのように異なるか、似ているのか?

(3) 2で差異や類似が生じてきた理由は何か?

3. 研究の方法

本研究は、「東アジアにおける米国社会科教育論の受容とインパクト」を、以下の5段階で明らかにする。1と2が「受容」の研究、3が「インパクト」の研究に相当する。

(1) 学会における米国社会科教育論の取り上げられ方(誰のどういう論を、どういう文脈で)

(2) 個人のなかでの米国社会科教育論の理解のされ方(誰のどういう論を、どういう意図で)

(3) 学会・個人レベルでの米国社会科教育論の受容が、政策・理論や実践に及ぼした影響。

(4) 1は文献調査、2はアンケート調査で明らかにする。3は1・2の結果と歴史的状況を関連付けながら推論する。必要に応じて、聞き取り調査を行なう。

(5) 4の結果を日中韓で比較考察し、相違と類似を抽出する。結果を米国の学会で報告する。

4. 研究成果

本研究の成果は、大きく3つのアプローチにまとめることができる。

第1に、日本における米国の教科論・研究方法論のインパクトに関する「文献調査」である。全国社会科教育学会の学会誌『社会科研究』(第1号~第70号)に掲載された全論文について、米国社会科の思想や方法がどのように選択、加工・解釈され、導入されてきたかを調査し、一定の傾向性を明らかにした。本アプローチの成果は、主に雑誌論文の16で発表した。

第2に、日米両国の社会科の教科論・方法論の特質に関する「(質的な)聞き取り調査」である。米国サイドでは、パイロット調査としてW.パーカーを皮切りにして、C.オマホニー、B.バンスレッドライト、T.ソーントンら米国を代表する研究者に、約60分ずつの本格的なインタビューを実施した。いっぽう日本サイドでは、全国社会科教育学会を拠点に方法論の確立に努めてきた森分孝治に約240分のオーラルヒストリーの聞き取りを実施した。両者の比較を通して、日米の研究史上の相互作用、とくに教科論・研究方法論の質的な差異と日本側の受容の論理を明らかにした。本アプローチの成果は、主に雑誌論文の2と10で発表した。

第3に、日本における米国の教科論・研究方法論のインパクトに関する「(量的な)質問紙調査」である。全国社会科教育学会と日本社会科教育学会の学会役員121名に対して調査票を郵送し、57%の回答を得た。回答の分析を通して、日本の社会科研究を主導している人々の研究テーマや問題意識、米国社会科に対する関心や受容の姿を実証的に明らかにできた。本アプローチの成果は、主に雑誌論文1と3で発表した。

これら3つのアプローチから得られた結論は、以下の3点である。

第1に、日本の社会研究者は、米国の社会科理論やカリキュラム開発・指導法開発の成果(おもに1980年代まで)の影響を一定程度受けているが、方法論での影響は小さい。とくに現代米国の学界(1980年代以降)ではメインストリームをなす実証的・経験的な研究の影響は、ほとんど確認できない。

第2に、日本の社会科研究者は、米国の社会科理論やカリキュラム開発の指導法に学び、日本の社会科カリキュラムや授業改善に

役立てようとしている。米国の研究・開発の動向を、グローバルな研究動向それ自体として捉えるとともに、**機能的にナショナル・ローカルな問題関心**にもとづいて捉えようとしている。

第3に、日本の社会科研究者は、**実証的・経験的な研究**よりも、**規範的・開発的な研究**を志向する傾向にある。これは日本の研究者が参照する米国の成果や人物・理論は、米国内で**規範的・開発的な研究**が盛んだった1960年代から70年代までのそれに集中することと符合している。

上のような傾向が見られる背景として、日本の社会科研究者は、「**研究**」と「**開発**」を**相互補完的な関係**で捉えていること、「**研究者**」と「**実践者**」は**連携・協働して課題解決や授業改善に努めるべき**と認知していること、などの理由が指摘できる。このような日本の傾向性は、「**研究**」と「**開発**」を質的に異なるアプローチとして区別して捉え、「**実践者**」は「**研究者**」が記述・説明すべき対象として見做される欧米の状況とは対照的である。

本3か年の科研では、「東アジア」全般ではなく、「日本における米国社会科教育論の受容とインパクト」を詳細に解明するにとどまった。今後は、今回の研究で確立した分析のフレームワークを、韓国・中国に拡張し、米国のインパクトの比較研究に発展させたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 16 件)

1. 草原和博, 渡部竜也, 田口紘子, 田中伸, 小川正人, 日本の社会科教育研究者の研究観と方法論 - なんのために、どのように研究するか -, 日本教科教育学会誌, 第37巻1号, 査読有, 掲載決定

2. 川口広美, 後藤賢次郎, 草原和博, 小川正人, 教科教育学研究とは何をどのように研究することか - 米国在住の社会科教育研究者に対するインタビュー調査を通して -, 日本教科教育学会誌, 第37巻1号, 査読有, 掲載決定

3. 田中伸, 草原和博, 渡部竜也, 田口紘子, 小川正人, 日本の社会科教育研究者の研究観と方法論(2) - 教科教育学研究者が目指すべき研究スタイルと理想像 -, 『大阪大谷大学紀要』第48号, 査読なし, 2014, pp56-75

4. Kazuhiro Kusahara, Thomas Misco, Tatsuya Watanabe, Hiroko Taguchi, Noboru Tanaka, and Masato Ogawa, Disciplinary Perspectives and Methodologies of Japanese Social Studies Researchers, The Journal of Social Studies Education, The International Social Studies Association, Vol. 3, 査読なし, 2014, pp17-36

5. 渡部竜也, 米国における「批判的思考」論の基礎的研究() - プルーナーの「学問の構造」論をMACOSから読み解く -, 東京学芸大学紀要人文社会科学系, vol.65, 査読なし, 2014, pp1-22, 2014

6. 渡部竜也, 市民的資質育成における規範的価値学習の到達点 - 道徳性発達教育とハーバード社会科の比較を中心に -, 東京学芸大学紀要人文社会科学系, vol.64, 査読なし, 2013, pp1-23

7. 草原和博, 米国社会科研究の動向とその論点争点, 社会科研究(全国社会科教育学会) 第77号, 査読有, 2012年, pp.25-28.

8. 草原和博, 多文化的性格の地域を教師はどのように教えるか - 社会科教師の意思決定の特質とその要件 -, 『社会科教育研究』(日本社会科教育学会) No.116, 査読有, 2012, pp57-69

9. 渡部竜也, 思想的価値を扱う学習の市民的資質育成における原理的限界 - 米国の「価値分析」学習論と「価値明確化」学習論の比較的考察を通して -, 東京学芸大学紀要人文社会科学系, vol.63, 査読なし, 2012, pp1-46

10. 草原和博, 日本の社会科研究の方法論的特質 - シェーバーと森分の研究観の接点と相違を手がかりにして -, 『社会科教育論叢』(全国社会科教育学会), 第48集, 査読有, 2012, pp97-108

11. 渡部竜也, 「授業研究」からみた社会科研究の方法論と国際化の課題 - 我が国の「規範科学」としての授業研究方法論: 6つの展開 -, 『社会科教育論叢』(全国社会科教育学会), 第48集, 査読有, 2012, pp47-56

12. 田口紘子, 米国の社会科研究の方法論的特質 - テキサス大学オースチン校「小学校社会科教育法」を事例にして -, 『社会科教育論叢』(全国社会科教育学会), 第48集, 査読有, 2012, pp77-86

13. 田中伸, 英国市民性教育研究の方法論的特質 - 3つのアプローチにみられる研究目的・内容・方法の特質と課題 -, 『社会科教育論叢』(全国社会科教育学会), 第48集, 査読有, 2012, pp87-96

14. Noboru TANAKA, Methodological differences in Japanese and British research on citizenship education, Creating Communities: Local, National and Global, Children's Identity and Citizenship in Europe Academic Network, Children's Identity and Citizenship in Europe, 査読有, 巻無し, 2012, pp81-93

15. Noboru TANAKA, The Structure of Learning Environments in Elementary Social Studies Education Aimed at Methodology of Inquiry: Educational Practice for Citizenship through Analysis of Media Used, The Journal of Social Studies Education, The International Social Studies Association, Vol.1, 査読

なし, 2012, pp1-10

16. 草原和博, 藤本奈央子, 松原直哉, 渡邊巧, 日本の社会科教育研究の動向と特質, 論文集 第1回全国社会科教育学会・韓国社会教科教育学会研究交流, 日韓社会科教育研究の新しい動向(全国社会科教育学会・韓国社会教科教育学会), 査読なし, 2011, pp49-74

〔学会発表〕(計 13 件)

1. 草原和博, 社会科教育研究は何のためにすべきか - カリキュラム研究を視点にして -, 全国社会科教育学会 第62回全国研究大会(パネル型研究発表B), 2013年11月9-10日, 山口大学

2. Hiromi Kawaguchi, Kazuhiro Kusahara, Realities in Classrooms: Japanese Social Studies Teachers' Teaching and Perceptions, 9th CitizED Conference, 13-15 July 2013, Tokyo, Japan

3. 渡部竜也, 草原和博, 田中伸, なぜあなたはその内容をその方法で教えるのか」と問うところから始める教師教育論 - レヴステイック・バートン・ソーントンのPCK論批判 -, 日本カリキュラム学会 第24回大会(自由研究 -6), 2013年7月6-7日, 上越教育大学

4. Hiromi Kawaguchi, Kazuhiro Kusahara, What Japanese School Teachers Say about Social Studies?, CUFA (College and University Faculty Assembly), NCSS 92th Annual Conference, Nov 16-18 2012, Seattle, USA

5. Sherry Field, Hiroko Taguchi, Elizabeth Bellows, Mary Ledbetter, Kazuhiro Mizoguchi, Japan and the United States: Learning from a Japanese and an American Teacher and Each Nation's Textbook Portrayals about the Other, CUFA (College and University Faculty Assembly), NCSS 92th Annual Conference, Nov 16-18 2012, Seattle, USA

6. 草原和博, 渡部竜也, 田口紘子, 田中伸, 小川正人, 日本の社会科教育研究者の研究観と方法論 - なんのために, どのように研究するか -, 全国社会科教育学会 第61回全国研究大会(第17分科会) 2012年10月20-21日, 岐阜大学

7. 草原和博・山田秀和・佐藤章浩, 社会科学教育の再構築, 全国社会科教育学会 第61回全国研究大会(シンポジウム) 2012年10月20-21日, 岐阜大学

8. Hiromi Kawaguchi, Kazuhiro Kusahara, What Japanese social studies teachers say about Citizenship Education, 8th CitizED Conference, May 24-26 2012, York, United Kingdom

9. Hiroko Taguchi, Elizabeth Bellows and Sherry L. Field, Japan in U.S Elementary History Textbooks and the U.S. in Japanese Elementary History Textbooks, Society for

the Study of Curriculum History 35th Meeting, Apr 13-17 2012, Vancouver, Canada

10. 草原和博, 日本の社会科教育研究の動向と特質, 第1回全国社会科教育学会・韓国社会教科教育学会 研究交流, 2011年12月11日, 大阪教育大学

11. Masato Ogawa, Kazuhiro Kusahara, Paper Session; A Comparative Study of Social Studies Research in Japan and the United States, CUFA(College and University Faculty Assembly), NCSS 91th Annual Conference, Nov.30-Dec.4 2011, Washington DC, USA

12. 草原和博, 藤本奈央子, 松原直哉, 渡邊巧, 日本の社会科研究に対する米国社会科のインパクト - 『社会科研究』の研究動向にみられる日本型教科教育学研究の確立 -, 全国社会科教育学会 第60回全国研究大会(第14分科会) 2011年10月8-9日, 広島大学

13. Masato Ogawa, Kazuhiro Kusahara, Illuminated Realities; Examinations of English, Japanese, and U.S. Social Studies Textbook, 30 Years After 1981 Japan/United States Textbook Study Project: How Are They Portrayed Now?, AERA (American Educational Research Association), 2011 Annual Meeting, April 8-12, 2011, New Orleans, USA

〔図書〕(計 7 件)

1. ヘンリー・A・ジル著/渡部竜也訳, 春風社, 変革的知識人としての教師: 批判的教授法の学びに向けて, 2014年, 428p

2. スティーブン・J・ソーントン著 / 渡部竜也, 山田秀和, 田中伸, 堀田諭訳, 春風社, 教師のゲートキーピング - 主体的な学習者を生む社会科カリキュラムに向けて -, 2012年, 268p

3. 草原和博, 明治図書, 新社会科教育学ハンドブック, 2012年, pp67-75

4. 渡部竜也, 明治図書, 新社会科教育学ハンドブック, 2012年, pp93-101

5. 田口紘子, 明治図書, 新社会科教育学ハンドブック, 2012年, pp178-185

6. 田中伸, 明治図書, 新社会科教育学ハンドブック, 2012年, pp392-401

7. 草原和博, 図書文化社, 教育方法40 デジタルメディア時代の教育方法, 2011年, pp264-77

〔その他〕

ホームページ等

http://jerass.jp/?page_id=153

6. 研究組織

(1) 研究代表者

草原 和博 (Kusahara kazuhiro)

広島大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号: 40294269

(3)連携研究者

渡部 竜也 (Watanabe Tatsuya)

東京学芸大学・教育学部・講師

研究者番号：10401449

田口 紘子 (Taguchi Hiroko)

鹿児島大学・教育学部・講師

研究者番号：10551707

田中 伸 (Tanaka Noboru)

大阪大谷大学・教育学部・准教授

研究者番号：70508465